

2021年度東広島市教育委員会主催・広島大学マスターズ共催市民講座

「小学生のための実践的な将棋講座」実施報告

広島大学マスターズ会員 早瀬光司

本講座の趣旨：各小学生が将棋を通して、「自分で考える」、および、「深く考える」を目指す。

指導対局方法：令和3年8月4日、5日、11日の3回（13時30分～15時）に、今年で3年目となる「小学生のための実践的な将棋講座」を開講した。受講生10名の内訳は、1、2、3、4、5年生の各2名で、机五枚を円形に並べ机一つに将棋盤を2枚置いて小学生2名ずつが円形の外側に座り、（日本将棋連盟・五段の）早瀬が内側に入って10名全員に対して順繰りに指して廻る「将棋の多面指し」を行い、今年は10名全員に対して早瀬が駒を8枚落とす「8枚落ち」で指導対局を行った。

指導結果：1日目（8月4日）は、早瀬からは特に指導や助言をすることなく小学生10名に自由に将棋を指させたところ、時間内にほぼ10名全員が1局を指し終えることができた。ただ、早瀬に勝った小学生は1～2名のみで、ほとんどの子が相手陣への攻め方を知らないことが分かった。そこで、翌2日目は、どのように相手陣を攻めたらよいのかを細かく指導・助言する方針に決めた。

2日目（8月5日）は、正しい答え（最善手）を直接には教えないが、ヒントを出すなどして、「8枚落ち」でどのようにして相手陣を攻めたらよいのかを各小学生毎に細かく助言・指導した。早瀬のヒントに応じて10名全員が飛車と角を成って早瀬陣に侵入することができた。しかし、30数手目の或る局面に至ると、全員が最善手を見つけられなかった。そこで、早瀬は「龍馬（角が成った駒）を動かす」というヒントを与えて、最善手を（自分で考えて）指してくるまで気長に待った。

そのうちにやっと、或る一人が、自分の龍馬を一つ左に動かして（早瀬の）歩を取った。早瀬は「はい、そうです、これが正解です。」と言って、その着手の意味を説明してあげた。その後、他の子らもその最善手に気付くようになり、その手に気付くとその小学生の顔が急に明るくうれしい顔になっていくのが見て取れた。これは、誰にとっても嬉しい「新しい発見の喜び」に相当する。

3日目（8月11日）も、やはり最善手を直接には教えないが、ヒントを出すなどして進め、途中、面白い局面を幾つも経験して小学生達は十分に楽しむことができた。最終的に小学生全員が早瀬に勝つ局面まで進めることができ、小学生はみな喜び、早瀬も大いに喜しかった。

4日目（8月12日）、早瀬は助言を控えて各自に自由に指させて、2～3日目で得た「学び」をどれくらい実践できるだろうかと楽しみにしていた。しかし、大雨警報のため将棋講座は中止となった。

考察：今回は、興味深い出来事を二つ経験した。

一つ目は、相手から取った駒を手に握りこんでしまっている子や、両手を同時に使って指している子がいたこと等だった。その子らには、「取った駒はここに置きます」とか「指す時は自分の利き手だけを使います」とだけと言って促した。或る意味で小学生の「行儀」に相当する内容になるが、実務・実践の中で行うと、言葉が空（くう）を切ることがないので、かなり有効であった。

二つ目は、一つの机には将棋盤を2枚平行に並べてあり、早瀬はその2枚の将棋盤の中間に座って右側の子と指してから左側の子と指して、次の机に移っていく。何回か廻ったのち或る机に来たとき、或る子の将棋盤が隣りの子のとは平行ではなく、早瀬の方に向き合うように傾けて置かれてあった。早瀬は、これにはとてもうれしく驚いた。誰から言われたわけでもなく、その子は早瀬が指しやすいようにと将棋盤を早瀬の方に向けてくれていたのだった。その子の為したことは、真の意味での「思い遣り」や「心遣い」の結果であると思われた。なお、早瀬は、彼の為した「思い遣り」・「心遣い」は、彼の（持って生まれた）天性に大きく由来するものであろうと考えた。

元気